

彼岸繚乱

忘れ得ぬ人々

堀田善衛



彼岸繚乱

忘れ得ぬ人々

堀田善衛

筑摩書房

彼岸繚乱

一九八〇年一〇月三〇日 初版第一刷発行

著 者 堀田善衛

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八
振替・東京六一四一二三 郵便番号・一〇一―一九一
TEL 二九一・七六五一 (営業) 二九四・六七二一 (編集)

印刷・厚德社 製本・矢嶋製本

装画・島 眞一 装幀・中島かほる

彼岸繚乱

目次

I

良平と重治 『梨の花』 中野重治	5
中野重治と空気と窓	19
他人の書いた文章を、創作・小説中に 引用あるいは援用する方法について	22
墓からの声 中野重治追悼	31
堀辰雄のこと	49
「うああ……」 室生犀星『杏つ子』論	55
犀星詩を愛す	61
日本文学の怪談師たち 宇野浩二、室生犀星、正宗白鳥、佐藤春夫	71
広津和郎氏	88
物いわぬ人 原民喜氏	91
原民喜の文学と現代	96
潔癖人 平野謙氏	102

聖なるものの追求 海老原喜之助 106

海老原喜之助 108

パリの海老原喜之助 112

さらば、海老原喜之助よ 117

Ⅱ

加藤道夫君 123

加藤道夫 127

今年の秋 十返肇のこと、加藤道夫のこと 132

くりごと 高橋和巳君 145

自前の実存主義 椎名麟三君とその文学を悼む 149

告別の辞 明後日会を代表して 153

さらば、若き日の友よ 追悼・福永武彦 156

『風媒花』について 160

輝く内臓の展観 武田泰淳『人間・文学・歴史』 164

武田泰淳

167

シンダ バッダ！ 弔辭

170

彼岸西風 武田泰淳と中国

174

Ⅲ

奇妙な一族の記録

193

父・私・芸妓

210

私の中の日本人 堀田勝文と小泉信三

214

あとがき——読者諸氏に

222

初出一覧

224

彼岸繚乱

——忘れ得ぬ人々——

I

良平と重治

——『梨の花』中野重治——

一

あるとき十返肇の問いに答えて私が言った、中野さんかあ、ありやほんとに北陸の百姓だな、北陸の百姓の「さべり」（喋り）が、まるでまるつきりそのまんまに出ていて、理屈っぽいところなんぞは、ひよっとして隅々まで熟読しているレーニンなんぞのなにかが出ているのかもしれないが、ありやほんとに北陸の百姓のさべりだな、と。すると十返肇は、いくらかはこれはしたり、というような面持ちをつくって、君が、君がそんなふうなことを言うのかね、というに近いうことを言った、という所以のものは、私が作家の出身とか田舎とかというものを強くは見ないという趣旨を建前にしている、というふうに十返氏が解していたせいであつたかもしれない。あるいは、そうではなかったかもしれないが、とにかく、中野重治の、この『梨の花』だけではなくて、

『むらぎも』——これの中国訳の題名は『五臟六腑』というのであり、この訳名もしたたかに面白いが——にしても、私が読んでいて、私はほとんど肉体的に、そうしてまず第一に、北陸の百姓のさべりを感じてしまうのである。友人が、『むらぎも』や『梨の花』にしばしば見られる回想、連想の運び方、あるいはその継ぎ目が、プルーストに似ていると言ったことがあったが、このプルーストと百姓のさべり、のぶつかり具合が私にはまことに面白かった。北陸風に、いや『梨の花』のことばでそれを言えば、「おもっしょ」かった。

しかし、ここで私がつかっている北陸ということばは、実はあまり正確なものでも、それほど統一的な実質のつまったものでもない。普通に北陸、あるいは北国という場合には、京都に近いところからかぞえて行つて、福井、石川、富山、新潟、つまり越前、加賀、越中、越後のこの四つの地方を言うのであらうが、当然のことながら、この四つはそれぞれにちがついて、私自身の感じだけで言うことを許してもらえば、越中のまんなかに呉羽山という山があり、その西と東とを呉東、呉西とわけているが、越前からこの呉西までは、どうやら一つのユニットをなしていないことはない、より大ざっぱに言うならば、歴史的には京都文化圏のなかにそれが明らかに入っている、という気持がしている。ということは、呉東から越後にかけては、それはちよつと違ふ、という気持が、その裏にあるということなのである。中野重治は、福井県坂井郡の生れである。一九〇二年（明治三十五年）である。ついでに言っておけば、私は富山県射水郡の出であり、

中野氏は私より十六歳年長であり、彼は自作農であり、私は没落した回漕問屋の倅であった。彼は福井中学から金沢の四高をへて東京へ出た。私は金沢の中学をへて東京へ出た。『梨の花』で言えば、幼年時代は「林の和子^{わこ}さん」みたいなものであったろう。

たいていの、いやほとんどの人は、長年にわたって中野氏の作品を愛読して来た人を除いては、いやそういう人でも、とにかく読みにくい、読みづらい、読むのにとてもし時間がかる、と言う。私にもそれが想像出来る。しかし、それは想像出来るだけであって、実は、私にとっては、ちっとも読みづらくもなんともないのである。たとえばこの『梨の花』にしても、はじめの二三行を読むというと、東京で私がえたらしい化けの皮がするりとむけてしまつて、要するに私は、ただただ耽読してしまうのである。

徳利をもつて小学一年生の良平が酒屋の高瀬屋から帰つて来る。「帰つたぞア……」と言う。そうすると、私も「帰つたぞア……」と、ぞアという語尾の具合を頭のなかで発音してみる。すると私も化けの皮をぬいで「帰つたぞア」と言つて田舎へ帰つた気になる。「めえろのこ」(女郎の子)というのが出て来れば、そうだ、あいつはめえろのこだった、と思う。親戚あるいは分家は、「いっけ」(一家)であり、仏壇の下にある、「円い井鉢のような金属」を「革をきせた木の棒」で打つと「があん、もん、もん、もお……」とこもつて鳴る。ものは、「がんもんも」というものであり、「さんまい」あるいは「さんまい」は、火葬場あるいは墓場であり——「ゆうれん」

は、幽霊であり、「さんばっちゃ」は、散髪屋であった。方言、あるいはことばのなまりが、私の生れ育ったところとは、加賀という大県を一つあいだにしているにもかかわらず、ひどく似ている、ほとんどおなじであることに、むしろおどろきながら私は読んで行く。

ついでに言えば、かつて私はところを九州においた、九州ことばの出で来る作を一つ書いたことがあった。それを読んで中野氏が私に訊ねた。堀田君はこの生れかね、あの九州弁はまるでおれの田舎みたいだな、と。私はまったく汗が出てしまった。

幼年時代に、こどもの私と相手のこどもがなにかをしてあそんでいる。いくつかあそびをちがえて、次々とそれをやる。そろそろそのタネがつきてしまった。退屈になってくる。そうすると二人はなんとなく軒端に材木などが少々つんであるところに坐り込み、膝をかかえる。私か、相手のこどもかが、そこで必ず、

「さべろか……」

と言う。この「さべろか……」には、これからなにやら秘密で、未知の、いかように発展して行くかわからぬところ、あるいはものにのり出して行くといった、知能犯的な気味があつて、「さべろか……」という台図でもってこども二人の背筋が、ぞくぞくとするのである。

そこで二人の「さべり」がはじまる。『梨の花』のように、話題はいくらでもある、三十分でも四十分でも、こども同士が、ぼそぼそと、日の暮れるまで、「さべって」いる。この「さべり」、

お喋り、議論、理屈、会話、対話のあいだに、少し事を大げさに言えば、こどもは訓練されて行く。町や村の情報に通じ、それをこどもなりに判断し、評価して行く。空想し、論理化する。しかも、当然のことに、この「さべり」は、とりとめがない。きつかけ次第で、はなしはどこへでも飛んで行く。がしかし、必ずまたもとへ戻る……。

中野重治の連想方式、回想方式——私の友人がプルーストのどこかを思わせる、と冗談めかして言ったもの——は、私には、この、こどもの「さべり」以外のものとは到底思えない。それ以上のもでも以下のもでも以外のものでもないと思えない。これは価値判断ではない。それがそうとしか私には思えぬと言っているだけであって、それが私には心からたのしい。皇太子が来る、伊藤博文が殺された、日韓合併になった、しかしそれら日本の、いわば上部での出来事は、どうしても良平の「さべり」の世界の中心部にまでは乗り込むことが出来ない。その力が向う様の方でない。皇太子にも、伊藤博文にも、日韓合併にも、良平の「さべり」のなかへまで乗り込む力がない、その力に欠けているのである。良平が成長して、『鑿^{ウツ}』、『手』、『歌のわかれ』、『街あるき』、『むらぎも』の世界に乗り込み、あるいはねじり込まれても、そうして向う様の方から警察や刑務所までがくり出されて来ても、結局、それらのものは、良平の世界からは、われわれのことばで言えば、さらに出されて、しまうのである。その証拠物件の一つが『梨花の花』であるであらうし、このとき、「さべろか……」という合図によって入って行った「さべり」の世

界は、良平の育った福井の在であると同時に、倫理であり、道徳であり、美であり、従ってここから逆に、成長した良平は、皇太子に、伊藤博文に、日韓合併に、警察、刑務所、わけてもそれから一切の根拠としての天皇制にむかって美的に、倫理的に、道徳的に戦って行かなければならなくなる。私は革命家、日本共産党中央委員としての中野重治と、芸術家としての中野重治の、その構造をこんな具合に解している。彼の戦いは本質的に防衛戦である。何を防衛するか。美を、倫理を、道徳を。従って、堀辰雄の『幼年時代』とくらべてみればわかるのであるが、そこに幼時の現実愛惜というものがあるにはあるにしても、それが過去形で、ではなくて、文体もなにもすべて現在形で書かれてあることの理由もあると思われる。この現在形による現在が、彼の恐らくは一生を通じての、内面の現在なのである。

従って、と言えば妙なことになるかもしれないが、見た眼には、良平は基本のところで成長などしやしない。極言すれば、尋常一年生の良平にとっても、中学一年生の彼にとっても、五十六歳の重治にとっても、「よくわからぬ」ことばかりが起ることになる。一九三二年、重治が二十九歳のときに書かれた『善作の頭』、それから同年に『コドモノクニ』に発表された『きしゃ』と『梨の花』とを読みくらべてみると、そのことが少しわかる。この『きしゃ』という『コドモノクニ』のためのものしまいの方は、こんなになっている。「さんきちが、はじめて、きしゃにのったときのこと、そのはやいこと、はやいこと、」さんきはかんしんしてしまった。とこ